

父親アイデンティティを規定する要因に関する探索的検討

Exploratory Study on Factors that Contribute to Fathering Identity

山下 倫実¹⁾

Tomomi YAMASHITA

石田 有理¹⁾

Yuri ISHIDA

加藤 陽子¹⁾

Akiko KATO

要 旨

本研究の目的は、夫婦から家族へと関係性が移行する時期と考えられる第1子誕生後の父親を対象として、父親アイデンティティの獲得に育児ストレス及び育児行動の自己評価がどのような影響を与えるのか探索的に検討することであった。

平成29年3月にクロスマーケティング社に依頼し、現在3歳未満の子どもが1名のみの家庭を対象にWEB上でのアンケート調査を実施した。本研究の趣旨に従って、男性100名の回答を用い分析を行った。

その結果、父親アイデンティティは3因子構造であることが確認され、親としての自信のなさ、親としての効力感に加え、親としての自信と共に、自らの生きがいを優先する項目の負荷量が高い自己優先的な親役割という因子が得られた。

また、育児ストレスや育児行動の自己評価が父親の親としてのアイデンティティに及ぼす影響については、育児ストレスの中でも「母親の理解のなさ」及び「心身の疲労」は父親の親としての自信を低下させたり、親役割を果たしていると評価しながらどこか自己優先的なアイデンティティを取得させる可能性があることが示唆された。一方、育児行動については、育児において「対子ども育児」や「対母親支援」を頻繁に行なっているということが父親アイデンティティの獲得に影響するが、その影響は育児ストレスや育児に対する心構えによって左右される可能性が示された。今後の展望として、父親の親としてのアイデンティティが母親や子どもとの関係の中で、どのように調整されていくのかというプロセスについて縦断的に検討する必要性が述べられた。また、より具体的な出生前の準備教育や育児シミュレーションを通して、父親としてのアイデンティティを肯定的に育むための新たな教育についても検討の余地があることが指摘された。

¹⁾ 十文字学園女子大学人間生活学部人間発達心理学科

Department of Human Development Psychology, Faculty of Human Life, Jumonji University

キーワード：父親アイデンティティ、育児ストレス、父親の育児行動、夫婦関係

【問題】

近年、人口減少と少子高齢化の急速な進展に対する危機感から、社会が女性に求める役割は多様化の一途をたどっている。日本政府により平成19年には「仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）憲章」、平成27年には「女性活躍推進法」が策定され、多様な働き方・生き方が選択できる社会の実現を目指すという目標の下、女性が家庭と職業生活を両立することが可能な働き方を実現するために、法律の整備や行動計画の策定が進められている。このような社会変化を受けて、平成28年社会生活基本調査—生活行動に関する結果—（総務省統計局、2017）によれば、過去20年間の育児時間の推移は男女共に増加傾向となっており、6歳未満の子どもがいる世帯に着目すると、平成8年に比べ、夫の家事時間は17分で12分増加、育児時間は49分で31分増加している。一方、妻の家事時間は3時間7分で1時間1分の減少、育児時間は3時間45分で1時間2分の増加となっている。このように現状では男性と女性の家事・育児時間に偏りはあるものの、男性が家事・育児を担う時間は確実に増加している。

柏木・若松（1994）は、父親の育児・家事参加度の高さは母親の否定的感情の軽減につながると同時に、父親自身の子どもへの肯定的感情が強まることを示唆している。同様に、日隈・藤原・石井（1999）は、父親の発達には父親の役割観と育児家事行動の行動得点の高低が影響していることを指摘しており、子どもに対する育児行動や母親に対する精神的援助行動を通して、自己抑制や視野の広がり、柔軟さなどに向上が認められ、生き甲斐を感じている可能性に言及している。一方、宮本・藤崎（2008）はそのレビューの中で、『社会構造の急激な変化により父親役割にも多くの役割が求められるようになり、「どんなふうに子どもと接したらよいかわからない」（読売新聞、2008）というように、モデルとなる父親像がないままに新しい父親役割を求められる中で、遂行することに困難を感じて育児に焦りを感じる父親も現れている。』と述べている。以上より、男性にとって育児を担うことは親としての自己を確立し、人間として成長していく契機となる一方で、父親としての役割に対する不安や葛藤を増大させるものでもあると考える。

岡本（2007）によれば、成人期のアイデンティティの発達をとらえるうえで、「個人としてのアイデンティティ」と「関係性としてのアイデンティティ」の2つが重要な柱であるという。岡本（1996）は、母親を対象に育児期における女性のアイデンティティの様態と家族関係について検討している。そして、個としてのアイデンティティと母親アイデンティティを両立している統合型について以下の3つの特徴を指摘している。第1に、個としてのアイデンティティと母親アイデンティティの両方とも確立が不十分な未熟型より家庭生活に満足していること、第2に、個としてのアイデンティティの達成度は低いが、母親アイデンティティがよく達成されている伝統的母親型より、夫からよく理解・受容されていると認知していること、第3に、未熟型より家族に対して積極的に関与しているという点である。このような指摘をふまえるならば、男性が結婚や第1子の誕生に伴い新たな役割を受容し、「個人としてのアイデンティティ」に加え、夫や父親としてのアイデンティティを無理なく獲得することが、よりよい夫婦関係や子育ての環境整備のために必要であると推測される。

ただし、このような「個人としてのアイデンティティ」と「関係性としてのアイデンティティ」の調整には様々な困難が予想される。明野（2013）は子どもの誕生に伴う父親役割行動の調整には「育児」「家事」「妻の精神的支援」における調整過程や、仕事時間を調整し早く帰宅するなどの「生活習慣の修正」における調整過程があり、これらが同時に行われていることを先行研究のレビューより示唆しているが、実際にこのような過程が円滑に進むことは非常に稀である可能性が高い。なぜなら、夫婦2人の

時にはお互いのために費やしていた時間は圧倒的に少なくなり、家事や子どもの世話にかかる時間は増え、経済的な負担が重くのしかかることになる。そのため、出産後に結婚の満足度が低下することを示した研究も多く（中澤ら，2003；Belsky & Kelly, 1994）、個として、夫としてのアイデンティティを調整していくことが難しいと考える。また、男性と女性では親になった後、親としての自分の役割を受容していく過程に違いが認められる可能性があることが示唆されている。小野寺（2003）は、親になることに伴う役割意識の変化（社会に関わる自分、夫/妻としての自分、父親/母親としての自分）の観点から検討し、男性は親になると「社会にかかわる自分」が大きくなるが、「父親としての自分」は大きくなっていかないこと、女性は「社会にかかわる自分」が顕著に小さくなり「母親としての自分」がその分大きくなることを明らかにしている。以上より、第1子誕生後、父親は混乱した環境の中で親としてのアイデンティティと個人としてのアイデンティティの調整に取り組むと考えられるが、その実態についてはあまり明らかになっていないことがうかがえる。そこで、夫婦から家族へと関係性が移行する時期と考えられる第1子誕生後の父親を対象に、父親がもつ親としてのアイデンティティにはどのような特徴があるのかを明らかにしたい。

先述した明野（2013）や日隈・藤原・石井（1999）によれば、家事や育児に参加するほど、父親の親としてのアイデンティティが円滑に獲得されていく可能性が高い。ただし、男性の家事や育児への参加については、様々な問題点が指摘されている。たとえば、父親は「育児参加している」と感じているにも関わらず、「父の育児参加に満足していない」母親が4割弱であるとの報告がある（宮木，2014）。また、父親の育児は母親の育児とくらべると一時的、補助的な、いわば気が向いた時の育児となりがちであり、そのような父親の育児のあり方自体が母親にとってのストレスを増大させる可能性があるという指摘している（西尾，2013）。これを夫側から捉えれば、自分自身は積極的に育児に参加していると自己評価しているにも関わらず、妻がその努力を理解してくれず、家庭内での自分の役割が曖昧であるというストレスを抱える可能性がある。育児を分担する者として、育児に関する不安や心身の疲労は女性と同様にストレス源になると考えられるが、加えて母親の理解のなさによるストレスもまた父親の親としてのアイデンティティの獲得を妨げる要因であると推測される。そこで本研究では、父親アイデンティティの獲得に育児ストレス及び育児行動の自己評価がどのような影響を与えるのか探索的に検討する。

育児行動については、父親が直接子どもに働きかける対子ども育児を行うよりも、育児という意味においては間接的な関わりともいえる対母親支援を行うことが、母親の「父親の支援のなさ」ストレスを低減させることが明らかとなっている（西尾，2013）。また、母親の父親の育児行動に対する評価に着目し、育児ストレスが母親アイデンティティに及ぼす影響について検討を行った山下・加藤・石田（2016）においても、父親が母親への支援を行なっているほど、父親の支援のなさによるストレスを感じていても母親の親としての効力感が高まることが示唆されている。しかし、育児に対する支援という意味では間接的な対母親支援を行うことが父親の親としてのアイデンティティの形成にどのような影響を及ぼすのかについては明らかになっていない。そこで、本研究では父親の育児行動の自己評価を対子ども育児と対母親支援という2つの観点から検討を行う。また、小野寺・青木・小山（1998）は、子どもの誕生以前に抱いていた親になる意識が実際の父親としての養育態度や親意識にどのような影響を与えるかについて検討している。その結果、父親になる前から子どものことを考えると嬉しくなり自分と血のつながった子どもが生まれるのを楽しみにしていた男性は、親となってから積極的に育児に参加し子どもの世話を行っているが、父親になる実感があり、親となる心の準備ができていたからといって育児に協力的であるということとはなかったという結果を報告している。しかし、第1子出生後、具体的に

どのような育児行動が必要になるかという見通しは、子育てに対する心構えとなり、実際の育児における負担感を軽減する可能性がある。結果的に、子育てに対する心構えがなかった者より、育児の負担によるストレスを感じにくく、新しく誕生した子どもと母親との生活の中で親役割を円滑に獲得できると推測される。そこで、本研究では実際の育児行動の自己評価だけでなく、第1子出生前の育児に対する心構えについても検討を行う。

【方法】

調査協力者

平成29年3月にクロスマーケティング社に依頼し、現在3歳未満の子どもが1名のみの家庭を対象に、WEB上でのアンケート調査を実施した。200名（男性100名、女性100名）が回答したが、本研究の趣旨に従って、男性100名の回答を用い分析を行った。平均年齢は37.97歳（ $SD = 5.69$ ）であった。なお、本調査の実施については、本学の倫理審査委員会の承認を受けている（番号：2016-029）。

質問項目

質問を開始する前に、調査協力者のプライベートな情報について尋ねる項目が多数存在するため、①回答は全て記号化されコンピュータで統計的に処理されるため、個人を特定したり、情報が漏れることはないこと、②回答しづらい項目については、回答せず次の質問に移ってよいことを教示した。また、Web調査の最初のページに調査協力者が最後まで回答することをもって、本研究への参加の「同意」とすることについて明記した。

1) 家庭環境に関する項目

①年齢、②配偶者の年齢、③子どもの月齢、④結婚期間、⑤収入、⑥本人の収入が占める割合を尋ねた。①～④及び⑥は数値で自由に回答してもらった。⑤の質問項目のみ、「1. 200万未満」、「2. 200～400万未満」、「3. 400～600万未満」、「4. 600～800万未満」、「5. 800～1000万未満」、「6. 1000万以上」の6つの選択肢から1つ選択してもらった。

2) 夫婦関係満足度

諸井（1996）の「夫婦関係満足度尺度」を用いて、夫婦関係の満足度を評価した。尺度には、「夫」という文言が入っていたが、父親に回答を求めるため「配偶者」に統一して尋ねた。計6項目について、「1. ほとんどあてはまらない」～「4. かなりあてはまる」までの4件法で回答を求めた。

3) 父親の育児ストレス

清水・関水（2010）の「育児ストレス尺度（CSS短縮版）」を基に父親の育児ストレスを評価した。この尺度は、「心身の疲労」、「育児不安」、「父親支援のなさ」という3側面から育児ストレスを評価する尺度である。ただし、「父親支援のなさ」という下位因子については父親が回答することが難しい項目内容であった。そのため、清水・関水（2010）の心身の疲労、育児不安の項目に加えて、「妻は子育てに関して自分を必要としていないのではないかと思います」、「妻が一家を支える自分の苦勞を理解してくれない」、「妻が夫である自分よりも子どもの生活を優先することに対して不満に思う」、「妻の子育ては自分の理想の子育てと違っている」という4項目を新たに作成した。計16項目について、「1. 全く感じない」から「5. 非常に感じる」の5件法で回答を求めた。項目の詳細は結果で示す。

4) 育児行動の自己評価

西尾（2013）の父親育児行動リストを基に、父親が現在行なっている育児行動を評価した。この尺度においては、「子どもをお風呂に入れる」、「子どもと一緒に遊ぶ」など、直接子どもに働きかける育児行動である「対子ども育児」と、「炊事、洗濯、掃除などの家事をする」、「母親に対してねぎらいの言葉をかける」など、育児する母親を支援することによって間接的に育児に関わる「対母親支援」の2因子構造が確認されている。ただし、対子ども育児項目が7項目であるのに対して、対母親支援の項目が4項目と少なかったため、「母親と子どもの育て方やしつけの方針について話し合う」、「子どもができて、夫婦だけの時間を確保する」、「夫の両親との関係を上手に調整する」、「子どもができて、セックスストレスにならない」の4項目を追加した。計15項目について「1. 全くやっていない」から「5. 頻繁にやっている」の5件法で回答を求めた。項目の詳細は結果で示す。

また同尺度を用いて、現在の育児行動だけでなく、「あなたはお子様が誕生する前、以下の項目をどの程度行なうつもりがありましたか。最もあてはまるものを1つお選びください。」と教示し、出産前の予想についても尋ねた。「1. 全くやるつもりはなかった」から「5. 頻繁にやるつもりであった」の5件法で回答を求めた。

5) 父親アイデンティティ

父親の「親としてのアイデンティティ」を評価するために、山口（2010）の親アイデンティティ尺度及び母親アイデンティティ尺度を参考に、18項目を選択して用いた。「1. ぜんぜんそう思わない」から「5. まったくその通りである」の5件法で回答を求めた。項目の詳細は結果で示す。

【結果】

1. 父親の育児ストレスの因子分析

父親の育児ストレスの因子分析（最尤法・プロマックス回転）を実施した。固有値1.0以上の基準で3因子を抽出した（Table 1）。なお、因子負荷量が低い、もしくはダブルローディングしていた2項目

Table 1 父親の育児ストレスの因子分析

	I. 母親の 理解のなさ	II. 育児 不安	III. 心身の 疲労
16. 妻の子育ては自分の理想の子育てと違っている	.908	-.031	-.069
15. 妻が夫である自分よりも子どもの生活を優先することに対して不満に思う	.882	-.032	.060
13. 妻は子育てに関して自分を必要としていないのではないかとと思う	.811	.094	-.104
10. 子どもにどう接しているのかわからない	.754	.072	-.001
14. 妻が一家を支える自分の苦勞を理解してくれない	.530	.167	.177
7. 子どもの知的能力に気がかりがある	-.108	1.028	-.022
8. 子どもの顔つきや容姿容貌が気がかりである	.162	.797	-.057
11. 子どもの性格が気がかりである	.078	.617	.097
9. 同じ年頃の子どもの様子を知って、わが子が劣っているのではないかと不安に思う	.343	.588	-.119
2. 子育てから解放されて息抜きができる時間が少なすぎる	-.008	-.075	.935
1. 子どもの世話で他のやりたいことができない	-.218	.009	.824
3. 子どもの世話で自分の自由がきかないのがとても辛い	.249	-.127	.739
6. 育児で身体の疲れがたまっている	.005	.305	.527
5. 育児のために睡眠不足の日々が続いている	.158	.260	.358
因子間相関			
I		.733	.458
II			.353

「4. 夜間、育児のために何度も起きなければならなくて困っている」、「12. 育児のことを考えると、漠然とした不安を感じる」については除外し、再度因子分析を実施した。なお、抽出された3因子で14項目の全分散を説明する割合は66.58%であった。

第1因子は「妻の子育ては自分の理想の子育てと違っている」、「妻が夫である自分よりも子どもの生活を優先することに対して不満に思う」などの5項目で構成されていた。これらの項目は、父親が育児において母親に理解されていないと感じる際のストレスを示す因子であるため、「母親の理解のなさ」と命名した ($\alpha = .910$)。第2因子は、清水・関水 (2010) の育児不安とほぼ同じ項目で構成されていたため、「育児不安」と判断した ($\alpha = .904$)。第3因子も同様であったため、「心身の疲労」と判断した ($\alpha = .848$)。

2. 育児行動の自己評価の因子分析

現在、実際に行なっている育児行動の自己評価の因子分析 (最尤法・プロマックス回転) を実施した。固有値1.0以上の基準で2因子を抽出した (Table 2)。なお、因子負荷量が低い、もしくはダブルローディングしていた2項目「5. 子どもの保育園、幼稚園などの送迎をする」、「8. 炊事、洗濯、掃除などの家事をする」については除外し、再度因子分析を実施した。なお、抽出された2因子で13項目の全分散を説明する割合は50.56%であった。

第1因子は、「母親の話し相手になる」、「母親に対してねぎらいの言葉をかける」などの7項目で構成されていた。これらの7項目は西尾 (2013) の3項目と新しく追加した4項目からなる。これらの項目は、育児する母親を支援することによって間接的に育児に関わる育児行動を示す因子であると考えられ、「対母親支援 (現実)」因子とした ($\alpha = .892$)。第2因子は、「子どものオムツ、トイレの世話をする」、「子どもと一緒に遊ぶ」などの6項目で構成されていた。先行研究と同じく、直接子どもに働きかける育児行動を示す因子であると考えられ、「対子ども育児 (現実)」因子とした ($\alpha = .923$)。

Table 2 育児行動の自己評価の因子分析

	I. 対母親支援	II. 対子ども育児
9. 母親の話し相手になる	.944	-.128
11. 母親に対して労いの言葉をかける	.883	-.038
12. 母親と子どもの育て方やしつけの方針について話し合う	.746	.131
13. 子どもができて、夫婦だけの時間を確保する	.694	-.053
10. 母親の自由な時間を作るように努める	.608	.288
15. 自分の親と妻との関係を上手に調整する	.420	.192
14. 子どもができて、セックスレスにはならない	.270	-.036
2. 子どものオムツ、トイレの世話をする	-.122	.869
6. 子どもと一緒に遊ぶ	-.028	.793
3. 子どものミルク、食事の世話をする	.028	.684
7. 子どもの歯磨きを手伝う	-.038	.646
1. 子どもをお風呂に入れる	.092	.584
4. 子どもを寝かせる	.243	.414
因子間相関		
I		.733

出産前にどの程度育児行動を行なうつもりがあったかについても、同様の方法で因子分析を実施した。その結果、現在の育児行動の自己評価の因子構造とはほぼ変わらず、2因子が得られた。信頼性については、対母親支援（予想）が $\alpha = .922$ であり、対子ども育児（予想）が $\alpha = .835$ であったため、十分な信頼性が得られた。

3. 父親アイデンティティの因子分析

父親の親としてのアイデンティティ18項目について、因子分析（最尤法・プロマックス回転）を実施した。固有値1.0以上の基準で3因子を抽出した（Table 3）。なお、ダブルローディングしていた1項目「9. 子育てに疲れてしまい、どうしていいのかさっぱりわからない」については除外し、再度因子分析を実施した。なお、抽出された3因子で17項目の全分散を説明する割合は49.83%であった。

第1因子は「人からダメな親だと思われるのではないかと不安である」、「親としてどうあるべきなのかまったくわからない」など7項目で構成されていた。これらの7項目は親としての不全感や自信のなさを示す因子であると考えられ、「親としての自信のなさ」因子とした（ $\alpha = .862$ ）。第2因子は「親になってよかったと思っている」、「子育てを楽しんでいる」など5項目で構成されていた。これらの5項目は親としての役割を受け入れ、今後もうまくやっていけるだろうという見通しを持っていることを示す因子であると考えられ、「親としての効力感」因子とした（ $\alpha = .811$ ）。第3因子は「親として一人前だと思っている」、「子どもにとってよい親だと思っている」と親としての自信をみせる項目からなる因子である。ただし、「子育てより自分の生きがいを充実させることの方が重要である」といった個としての自分を優先させる項目も含まれていた。そのため、これらの5項目については、「自己優先的な親役割」因子とした（ $\alpha = .751$ ）。

Table 3 父親のアイデンティティの因子分析

	I. 自信の なさ	II. 親としての 効力感	III. 自己優先的 な親役割
7. 人からダメな親だと思われるのではないかと不安である	.851	.177	-.061
8. 親としてどうあるべきなのかまったくわからない	.815	-.005	-.023
16. 自分は親として不適格なのではないかと思う	.788	.064	-.081
17. 親として自分に何か意味のあることができるとは思えない	.684	-.086	-.063
13. 気持ちの上ではまだ親になりきっていない気がする	.590	.159	-.116
3. この先、子育てをどう進めて良いのか見当もつかない	.576	-.074	.276
2. 「親である私」は、本当の私ではないような気がする	.485	-.223	.290
12. 親になって良かったと思っている	.050	.978	-.198
14. 子育てを楽しんでいる	-.036	.680	.140
11. 親としての生き方は様々なので、自分に合ったものを積極的に選んでいきたい	.192	.591	.114
1. これまでも親として順調にやってきたし、これからも順調にやっていけると思う	-.065	.514	.224
6. 子育てについて自分なりの考えを持っている	.024	.513	.340
18. 親として一人前だと思っている	-.003	.029	.718
4. 子どもにとって良い親であると思っている	-.216	.231	.642
15. 親として関わっている時が、一番自分らしいと思う	.000	.124	.628
5. 子育てよりも自分の生きがいを充実させることの方が重要だと思う	.223	-.134	.551
10. 親としてやっていける自信がある	-.007	.169	.458
因子間相関			
	I	-.320	.306
	II		.244

4. 調査協力者の基本属性

仮説の分析に入る前に、調査協力者の配偶者の年齢、子どもの月齢、結婚期間、収入、本人の収入が占める割合などの特徴について述べる。まず、配偶者の年齢の平均は34.58歳 ($SD = 4.73$) であり、子どもの月齢の平均は19.34 ($SD = 9.06$) であった。また、結婚期間については平均52.09ヶ月 ($SD = 31.17$) であり、約4年間の結婚生活を送っていた。最も短い結婚期間は12ヶ月であり、最も長い期間は162ヶ月であった。

次に、世帯収入については、400～600万未満が33%で最も多く、次いで600～800万未満が21%であった。ただし、800～1000万未満、1000万以上を合わせると35%となり、グラフで見る世帯の状況—国民生活基礎調査（平成28年）の結果から -（厚生労働省政策統括官（統計・情報政策担当）、2018）の30～39歳の1世帯あたりの平均所得金額562.1万円と比較しても、末子が3歳未満の世帯の平均所得金額636.8万円と比較しても若干高い水準にあると考える。

5. 父親の育児ストレス、育児行動の自己評価（予想/現実）、父親アイデンティティの基礎データ

仮説の分析に入る前に、以降の分析で使用する各変数についての記述統計及び相関分析の結果をTable 4に示す。特徴的な点についてのみ述べる。まず、父親アイデンティティのうち、「親としての自

Table 4 家庭環境、夫婦関係、育児ストレス、育児行動、父親アイデンティティの相関分析

	家庭環境要因				夫婦関係満足度	育児ストレス			育児行動				父親ID		記述統計		
	配偶者年齢	結婚月数	子ども月数	収入割合	夫婦関係満足度	母親理解のなさ	心身疲労	育児不安	対母親支援(予想)	対子ども育児(予想)	対母親支援(現実)	対子ども育児(現実)	自信のなさ	効力感	自己優先的な親役割	平均値	標準偏差
年齢	.517**	.152	.075	.320**	.028	-.095	.057	.000	.118	.101	.011	.204*	-.211*	.043	-.114	37.97	5.69
配偶者年齢		.295**	.168	.166	.021	-.115	-.008	-.098	-.079	-.035	-.061	.034	-.123	.016	-.070	34.58	4.73
結婚月数			.359**	.006	.004	-.001	-.013	.000	-.123	-.100	-.134	-.047	-.091	.011	-.059	52.09	31.17
子ども月数				.216*	-.135	.085	-.081	-.050	-.015	-.082	-.104	-.068	-.119	.056	-.099	19.34	9.06
収入割合					-.126	.063	.047	.093	-.190	-.205*	-.094	-.154	.031	-.106	-.054	67.05	22.50
夫婦関係満足度						-.475**	-.108	-.258**	.259**	.246*	.303**	.196	-.315**	.358**	.058	2.85	0.89
母親理解のなさ							.505**	.746**	-.253*	-.256*	-.007	-.129	.635**	-.361**	.277**	2.30	0.88
心身疲労								.408**	-.002	-.035	.306**	.008	.415**	-.037	.186	2.74	0.79
育児不安									-.113	-.110	.070	-.066	.462**	-.160	.274**	2.38	0.98
対母親支援(予想)										.774**	.543**	.612**	-.122	.502**	.174	3.52	0.69
対子ども育児(予想)											.356**	.690**	-.196	.546**	.192	3.67	0.70
対母親支援(現実)												.589**	.092	.488**	.560**	3.27	0.74
対子ども育児(現実)													-.114	.578*	.421**	3.57	0.75
自信のなさ														-.157	.259**	2.76	0.71
効力感															.423**	3.57	0.65
自己優先的な親役割																3.07	0.61

* $p < .05$, ** $p < .01$

信のなさ」と育児ストレスの間では全てで正の相関が認められた。また、「親としての効力感」と育児行動の自己評価との間では全てで正の相関が認められた。一方、「自己優先的な親役割」は育児ストレスと育児行動の自己評価のどちらの変数とも関連があったが、育児ストレスでは、母親の理解のなさや育児不安のみ、育児行動の自己評価では現在の自己評価のみと正の相関が認められた。親アイデンティティ間でも、親としての自信のなさや効力感の両方と正の相関があることも特徴的である。

以上より、育児ストレスが高くなるほど父親の自信のなさも高まること、育児行動を出産後の母親や子どもに対する支援を予想し、実際に行なっているほど、親としての効力感が高まることがわかった。また、出産後の母親や子どもに対する支援を行っているにも関わらず、母親の理解のなさや育児不安によるストレスを抱えるほど、自己優先的な親役割の得点が高くなっていた。一見、親としての自信を十分に持っていることを示す因子であるが、育児ストレスや育児行動の多さによる疲労と関連がある可能性があり、必ずしも肯定的な親アイデンティティを獲得している状態ではないことがうかがえる。

6. 父親の育児行動及び育児ストレスが父親アイデンティティに及ぼす影響

各父親アイデンティティ（親としての自信のなさ／親としての効力感／自己優先的な親役割）を基準変数とし、Step 1に人口統計学的変数（年齢、配偶者の年齢、本人の収入が占める割合）、家庭環境変数（結婚期間、子どもの月齢、夫婦関係満足度）、Step 2に予想していた育児行動（対母親支援／対子ども育児）、現実の育児行動（対母親支援／対子ども育児）、育児ストレス（母親の理解のなさ／育児不安／心身の疲労）を説明変数としたステップワイズ法による階層的重回帰分析を実施した。その理由としては、親アイデンティティへの育児ストレスと育児行動の予想と現実（対子ども／対母親）の影響力を主として分析する目的があったためである。したがって、これらのメインの変数以外に親アイデンティティの評価に関わることが予測される人口統計学的な変数や、家庭環境に関連する変数はStep 1に投入し、統制したうえで、育児ストレスと育児行動の影響力を検討した。

解析の結果、親としての自信のなさの分析における説明率は44.4%で、説明率の検定は1%水準で有意であった（ $F=18.99$, $df=4.95$ ）。また、親としての効力感の分析における説明率は48.8%で、説明率の検定は1%水準で有意であった（ $F=17.92$, $df=5.94$ ）。さらに、アイデンティティの混乱の分析における説明率は45.8%で、説明率の検定は1%水準で有意であった（ $F=15.87$, $df=5.94$ ）。標準偏回帰係数をTable 5に示す。

結果より、父親アイデンティティのうち「親としての自信のなさ」には年齢が負の影響を及ぼし、心身の疲労および母親の理解のなさが正の影響を及ぼしていた。つまり、父親自身の年齢が若いほど、心身の疲労や母親の理解のなさによるストレスが高いほど、父親としての自信を失っていた。

次に、父親アイデンティティのうち「親としての効力感」には母親の理解のなさが負の影響を及ぼし、対子ども育児（現実）及び対母親支援（予想／現実）が正の影響を及ぼしていた。つまり、子どもが生まれる前に母親に対する育児行動を予想していたほど、そして実際に現在、母親や子どもに対する支援を行なっているほど、親としての効力感を高めていた。また、母親の理解のなさによるストレスが低いこともまた、親としての効力感を高める要因となっていた。

最後に、父親アイデンティティのうち「自己優先的な親役割」には心身の疲労及び対母親支援（予想）が負の影響を及ぼし、母親の理解のなさ、対子ども育児（現実）、対母親支援（現実）が正の影響を及ぼしていた。つまり、子どもが生まれる前に母親を支援することを予想していなかったにも関わらず、実際には母親や子どもに対して支援をしていると自己評価しているほど、自己優先的な側面を残しつつ

も親役割を果たしていると評価していた。また、母親の理解のなさによるストレスが高い一方で、心身の疲労によるストレスは感じていないほど、自己優先的な側面を残しつつも親役割を果たしていると評価していた。

Table 5 家庭環境、父親の育児行動、父親の育児ストレスが親IDに与える影響

説明変数	基準変数		
	親としての 自信のなさ	親としての 効力感	自己優先的な 親役割
Step 1			
年齢	-.170*		
配偶者の年齢			
結婚期間			
子どもの月齢			
本人の収入が占める割合			
夫婦関係満足度			
Step 2			
心身の疲労	.160†		-.167†
育児不安			
母親の理解のなさ	.515**	-.241**	.346**
対子ども育児予想		.214*	
対子ども育児現実		.239*	.255*
対母親支援予想			-.207*
対母親支援現実		.248*	.575**
R2	.444	.488	.458
(Adjusted)	.421	.461	.429
F	18.98**	17.92**	15.87**

† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

【考察】

本研究の目的は、3歳未満の幼い子どもをもつ父親が親としてのアイデンティティを獲得していく過程で、育児ストレス及び育児行動の自己評価がどのような影響を及ぼすのかを探索的に検討することであった。

まず、父親の育児ストレスを評価する尺度がほとんどないことから、清水・関水（2010）の育児不安及び心身の疲労を測定する項目に加え、新たに「母親の理解のなさ」という因子を想定した項目を作成した。その結果、育児ストレスとして3因子構造が見出され、信頼性も高いことが確認された。この下位因子は母親が父親としての自分の役割を理解してくれないストレスや、子どもと母親との関係に自分の居場所がないことによるストレスを反映するものである。この下位因子を含む尺度が男性の育児不安を評価する尺度として適切か否かを、今後も引き続き検討する必要があると考える。

また、父親アイデンティティについては、現在3歳以下の子どもの子育てを行なっている母親を対象とした山下・加藤・石田（2016）と同様の尺度を用いてその構造を検討したが、母親アイデンティティとは異なる因子構造であることが示された。母親を対象とした先行研究では、親としての自信のなさ、親としての効力感、親役割の受容、親役割からの逃避という4因子構造が認められたが、父親のアイデ

ンティティには親としての自信のなさ、親としての効力感に加え、自己優先的な親役割という因子が得られた。岡本（1996）は、個としてのアイデンティティと母親アイデンティティを両立している統合型は家庭生活に満足し、夫や家族との関係も良好であることを示唆しており、本研究で得られた自己優先的な親役割も個と父親のアイデンティティを両立した、成熟したアイデンティティの獲得を示す因子とも考えられる。しかし、本研究の相関分析や階層的重回帰分析の結果をふまえると、日常的には肯定的な親アイデンティティを持っていると評価していても、育児におけるストレスや躰など困難な場面では揺らぎやすい親アイデンティティであることが推測される。この下位因子については、家族への帰属感や家庭内役割観、妻のサポート要請に対する感受性など、様々な変数との関連性を検討し、その意味合いを引き続き明確にする必要があると考える。

育児ストレスや育児行動の自己評価が父親の親としてのアイデンティティに及ぼす影響については以下のような結果が得られた。第1に、育児ストレスの中でも「母親の理解のなさ」及び「心身の疲労」は父親の親としての自信を低下させたり、アイデンティティの混乱を生じさせる可能性があるストレスであることが示された。特に、「母親の理解のなさ」によるストレスの影響は大きく、父親が親としての肯定的なアイデンティティを獲得するためには、第1子誕生という家族形態の変化に伴って、親の役割を果たしている自分自身を妻から認められていると感じることが必要であることが示唆された。山下・加藤・石田（2016）では、父親が子育てに協力的ではなく、自分の生活を中心に考えているといった「父親の支援のなさ」によるストレスが高くて、夫が対母親支援を積極的に行う場合に、母親の親としての効力感が高まることが示唆されている。つまり、夫は妻から父親としての自分を理解してもらうことを必要としており、他方で妻側は夫から子育てをしている自分を支援する行動を求めているというこれらの結果からは、適応的なアイデンティティの獲得には、夫と妻の間で役割を調整し、お互いにそれを認め合う過程が不可欠であると考えられる。ただし、第1子誕生後、初めての育児に取り組む中で、子どもと向き合うことに資源のほとんどを費やす母親に、本来なら妻を支えるサポート源となるべき夫に対しても配慮を求めることは過剰な要求となる可能性がある。このような時期に、周囲の人々や専門家が提供できる母親や父親への支援についても、今後検討していくべきであると考えられる。

第2に、育児行動については、育児において「対子ども育児」や「対母親支援」を頻繁に行なっているということが父親アイデンティティの獲得に影響するが、その影響は育児ストレスや育児に対する心構えによって左右される可能性が示された。親としての効力感はある程度実際に育児行動をとる中で獲得されていくことが推察できる。ただし、子どもが誕生する前から子どもに対する直接的な支援が必要であることを予想するほど、そして実際に育児に積極的に参加し、母親に対しても配慮をみせるほど親としての効力感が高くなる一方、子どもが誕生する前から母親に対して支援が必要であることを予想していなかったほど、そして実際に育児に積極的に参加し、母親に対しても配慮をみせていると自己評価するほど、自己優先的な親役割しか取得できない可能性がある。

男性にとって、子どもが産まれるにあたり、子育てに積極的に参加しなくてはいけないという意識は高く、またそのような育児に関する情報も溢れているため、子どもに対する育児行動は想像しやすいと考える。しかし、母親が育児を円滑に、健康的に行なうために配慮する行動については、それが間接的に育児を負担することにつながるという意識を持つことが難しいことが推測される。また、子どもに対する育児行動は、母親の育児を補佐する側面が強く、父親にとって強く主体性を求められるものとは捉えられていない可能性があるが、母親に対する支援は自分自身が行動する必要性が高いものであり、いざ予想していなかった支援を求められた際に戸惑いにつながりやすいことも推測される。これまで、父

親の育児参加を促すものとして、生まれてくる子どもに対する支援を学ぶための準備教育に重点がおかれてきたが、母親に対して具体的にどのような支援行動が必要なのかを伝える教育はあまりなされていない。今後、より具体的な出生前の準備教育や育児シミュレーションを通して、父親としてのアイデンティティを肯定的に育むための新たな教育が検討されることが望まれる。

最後に、本研究の今後の課題について述べる。本研究は横断的な調査であったため、父親アイデンティティの獲得プロセスについては厳密には検討できていない点を挙げる。家族の形態に大きく変化が生じる第1子出生後に焦点を当てることで、個人や夫としてのアイデンティティに加えて、親として新たなアイデンティティが形成される時期の検討を行うことはできたが、父親の親としてのアイデンティティが、母親や子どもとの関係の中でどのように調整されていくのかというプロセスについては明らかにできていない。また、子どもの月齢や同胞の誕生によって親に求められる具体的な役割は変わってきている。親としてのアイデンティティも変容していく可能性が考えられる。及川（2005）によれば、父親としての意識が現れる時期を考えると、女性と比して妊娠・出産など身体的な変化ともなう体験が得られない男性は、実際の育児を通じて初めて父性意識を獲得し、母親とは親性の獲得に時期のズレがあると指摘されていることから、男性と女性では、子どもとの関係性によって親としてのアイデンティティを育む時期が異なる可能性がある。以上については本研究の今後の検討課題としたい。

【引用文献】

- 明野聖子（2013）．妊娠期から乳幼児期における父親の親としての発達に関する文献レビュー 北海道医療大学看護福祉学部学会誌， 9， 65-71.
- Belsky, J.& Kelly, J.(1994).The transition to parenthood. New York: Delacorte Press. (安次嶺佳子（訳）（1995）『子供をもつと夫婦に何が起こるか』草思社)
- 堀洋道・吉田富二雄（2001）．心理測定尺度集Ⅱ 人と社会のつながりをとらえる〈対人関係・価値観〉 夫婦関係満足度尺度（諸井，1996），150-152.
- 日隈ふみ子・藤原千恵子・石井京子（1999）．親としての発達に関する研究—1歳半児をもつ父親の育児家事行動の観点から— 日本助産学会誌， 12， 56-63.
- 柏木恵子・若松素子（1994）．「親となる」ことによる人格発達：生涯発達の視点から親を研究する試み 発達心理学研究， 5， 72-83.
- 厚生労働省政策統括官（統計・情報政策担当）（2018）．グラフで見る世帯の状況—国民生活基礎調査（平成28年）の結果から—（https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/dl/20-21-h28_rev2.pdf）（2018年9月25日）
- 宮木由貴子（2014）．父親の子育てに関する一考察～30代・40代の父親の子育て状況と母親の意識～ Life design report， 210， 28-35.
- 宮本知子・藤崎春代（2008）．日本における乳幼児期の子どもをもつ父親研究の動向 昭和女子大学生活心理研究所紀要， 11， 57-66.
- 中澤智恵・倉持清美・田村毅・岸田泰子・木村恭子・及川裕子・森田千恵・荒牧美佐子（2003）．出産・子育て体験が親の成長と夫婦関係に与える影響（4）第1子出生後の夫婦関係の変化と子育て 東京学芸大学紀要， 55， 111-122.
- 西尾新（2013）．母親の育児ストレスに対する父親の育児行動の影響—育児頻度の評価及び父母間の評価の齟齬から— 甲南女子大学研究紀要（人間科学編）， 49， 59-74.
- 及川裕子（2005）．親性の獲得過程における変化とその影響要因の検討 日本ウーマンズヘルス学会誌， 4，

81-91.

岡本祐子 (1996). 育児期における女性のアイデンティティ様態と家族関係に関する研究 日本家政学会誌, 47, 849-860.

岡本裕子 (2007). アイデンティティ生涯発達論の展開 ミネルヴァ書房 36-39.

小野寺敦子 (2003). 親になることによる自己概念の変化 発達心理学研究, 14, 180-190.

小野寺敦子・青木紀久代・小山真弓 (1998). 父親になる意識の形成過程 発達心理学研究 9, 121-130.

清水嘉子・関水しのぶ (2010). 母親の育児ストレス尺度—短縮版作成と妥当性の検討— 子どもの虐待とネグレクト, 12, 261-270.

総務省統計局 (2017). 平成28年社会生活基本調査—生活行動に関する結果— (<http://www.stat.go.jp/data/shakai/2016/pdf/gaiyou.pdf>) (2018年9月25日)

山口雅史 (2010). 母親になるということ—母親アイデンティティを巡る考察 (椙山女学園大学研究叢書) あいり出版

山下倫実・加藤陽子・石田有理 (2016). 育児ストレスが母親アイデンティティに及ぼす影響に関する予備的検討—父親の育児行動に対する評価に着目して— 十文字学園女子大学紀要 47, 25-36.

【参考文献】

諸井克英 (1996). 家庭内労働の分担における衡平性の知覚 家族心理学研究, 10, 15-30.

読売新聞 (2008). [支えあって子育て] パパが楽しいこと一緒に 朝の時間、生かして 11月17日東京朝刊

付記

1) 本研究は十文字学園女子大学プロジェクト研究費の助成を受けて実施されたものである。

2) 本研究は、日本心理学会第81回大会 (2017年) において発表された内容に加筆修正を行ったものである。

